

## A-27) 興味ある MRI 所見を示し悪性脳腫瘍が疑われた1例

関 薫・金森 政之 (石巻赤十字病院)  
北原 正和 (脳神経外科)

症例は、68歳女性で平成8年6月に記銘力障害が出現し当科受診した。MRI では右シルビウス裂及び両側側脳室前角周辺に T2 強調画像で高信号域を認めるも異常造影所見がなく症状も軽いことより外来にて経過観察となった。その後、動作が緩慢になり見当識障害も出現したため同年8月当科入院となった。MRI (FLAIR 法) にて病巣がさらに明瞭に描出され、定位的生検術を施行したが病理学的には異常所見を認めなかった。入院後も症状は急激に進行し、同年10月には無動性無言の状態となった。その後 MRI にて右側頭葉から両側前頭葉に異常信号域が拡大するとともに右側頭葉に異常造影部分が認められるようになった。平成9年2月異常造影部分の拡大により脳ヘルニアを合併し死亡退院となった。本症例では、症状の進行の早さと最終的な MRI 所見から悪性脳腫瘍が疑われるが、初診時の MRI 上悪性所見が乏しい点、当初病理所見が全く正常であった点より稀な症例と考え報告する。

## A-28) 第三脳室前半部髄膜腫の1手術例

伊藤 誠康・府川 修 (いわき市立総合)  
増山 祥二・三谷 慎二 (磐城共立病院)  
(脳神経外科)

症例は39歳男性。鞍上部から第三脳室前半部にかけて存在する腫瘍を指摘され、当科に紹介された。CT にて軽度高吸収域を呈し、均一な造影剤増強効果を示した。MRI では、T1WI, T2WI および PWI にて、それぞれほぼ均一な等信号域を呈し、一様な Gd 増強効果を示した。脳血管撮影にて、腫瘍陰影を認めた。interhemispheric lamina terminalis approach にて、第三脳室内腫瘍はほぼ全摘できたが、出血が続く第三脳室前半底部は焼灼にて処理した。病理組織所見は fibroblastic meningioma であった。以上より、本症例は第三脳室底前半ほぼ正中部のくも膜組織を発生母地とした第三脳室前半部髄膜腫と考えられた。術後約1カ月の現時点で、記銘力障害と汎下垂体機能不全を認めている。考察：全髄膜腫のうち脳室内発生率は1.6% (成人例) と少なく、さらに第三脳室発生例の報告は稀である。第三脳室底周辺部のくも膜組織が発生母地と考えられた1手術例を報告する。

## A-29) 経時的に画像を追跡し得た微小嚢胞性髄膜腫の1例

塩屋 齊・菊地 顕次 (由利組合総合病院)  
須田 良孝・進藤健次郎 (脳神経外科)

患者は頭重感を主訴とする76歳・女性で、89年の頭痛の精査の CT では異常なかったが、92年の CT で右前頭部に低吸収域が描出され、96年10月の CT で低吸収域の増大が指摘され、当科へ入院した。腫瘍は CT で低吸収域、MRI では T1 で低信号、T2 で高信号、Gd-DTPA では網目状に増強され、脳血管撮影では extra-axial avascular mass であった。腫瘍は一部が硬膜と頭蓋骨に強く癒着している extra-axial mass であり、茶褐色透明・ゼリー状で、極めて軟かく吸引可能であった。腫瘍細胞間に多数の microcyst が観察され、一部には whorl formation や psammoma body を伴っており、微小嚢胞性髄膜腫と組織診断された。術後経過は良好で、頭重感は軽快し、独歩退院した。

## A-30) テント上下に発育した乳頭状髄膜腫の1例

久保川鉄也・西山 健一 (新潟県立中央病院)  
土田 正・田村 彰 (脳神経外科)

〔症例〕67才、男 [現病歴] 昭和60年、当院耳鼻科で右中耳真珠腫の摘出術を受けた。その後の経過観察中に MRI で右の小脳橋角部に 1.5 cm 径の腫瘍を認め、平成2年4月、当科で全摘出した。病理診断は乳頭状髄膜腫であった。平成7年7月 MRI で右中頭蓋窩錐体前方に 1 cm 径の腫瘍の出現を見た。平成8年11月、同腫瘍の増大を認め、手術目的で入院となった。〔手術〕右前頭側頭開頭で錐体前方に付着した黄赤色、弾性硬の腫瘍を全摘出した。〔病理〕円柱上皮様細胞の乳頭状の増殖が見られた。腫瘍細胞は、vimentin と NSE に陽性、cytokeratin と s-100 に一部陽性、GFAP, CEA, EMA に陰性であった。〔考察〕しばしば悪性の経過をとり組織像で乳頭状の増殖を示す髄膜腫は乳頭状髄膜腫と呼ばれているが、極めて稀なものである。本例では、腫瘍が錐体骨に浸潤するように増殖していたことが推測される。本例は、術後放射線療法を行い、現在経過観察中である。